

グリーンファームリハビリテーションの取り組み 第1報  
～作業療法ツールとして活用～

○清水隆大(OT)<sup>1)</sup> 田中晴之(OT)<sup>1)</sup> 種宏樹(OT)<sup>1)</sup> 阿比留晃嗣(PT)<sup>1)</sup> 山中卓也(OT)<sup>1)</sup>  
山口亜希子(CP) 木村彩香(MD)<sup>1)</sup> 山脇正永(MD)<sup>2)</sup> 青池仁美(他)<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>行陵会 京都大原記念病院

<sup>2)</sup>京都府立医科大学総合医療・医学教育学

<sup>3)</sup>タキイ種苗 研究農場 研究員

### 【目的】

当院回復期病棟において前頭葉機能の賦活など認知機能面への効果を期待して、作業療法ツールとしてグリーンファームリハビリテーション(園芸)を実施している。

### 【方法】

対象者は、発症から3ヶ月未満の脳血管障害を有する平均年齢81±7.8歳の男女8名とした。園芸期間は1ヶ月間(4回/週、40分/回)、活動前後比較を実施した。評価指標は、①前頭葉機能検査(FAB)、②認知機能検査(MMSE)、③機能的自立度評価法(FIM)、④気分プロフィール検査(POMS2)を使用した。評価は園芸実施直前と実施最終日とした。統計処理は、Wilcoxonの符号付き検定を使用した。また園芸中の言動を記録した。尚、本研究は全患者から同意を得て、当院倫理委員会の承認を得た。

### 【結果】

1) 実施前後の各評価の平均点(実施前/実施後)：

①FAB：9.7±3.6点/11.6±3.0点(P=0.049<0.05) ②MMSE：23.1±2.8点/24.7±3.6点(P=0.154>0.05) ③FIM：84.3±22.9点/95.7±18.0点(P=0.018<0.05) ④POMS2：T平均得点50.6±5.6点/53.5点±7.8点(P=0.271>0.05)

2) 観察記録：園芸開始時は、自発性が乏しかった。活動終了時は、「これもやろうか」などポジティブな発言が認められた。

### 【考察】

FABとFIMは有意差を認めた。発症から半年未満で自然回復段階である。園芸(作業療法)以外でも訓練を実施しており、看護介護による日常生活活動など日中活動的なリズムで生活している。これらの事が注意覚醒を促しADLの改善に繋がった。POMS2のV項目(活気)において低値にあった対象者の数値上昇が認められていた。園芸は活動性を促す手段として有効であった。豊田の研究によると「能動的な園芸活動では前頭葉機能の賦活」が認められている。今後も作業療法ツールとして活用して、グリーンファームリハビリテーションの効果検証を継続していく。